富国強兵からポツダム宣言まで

令和６年３月３日
黒田インターナショナルコンサルティング
黒田　毅

これらは日本が武士という現実とともに自己を有し、強国における世界の覇権の追求へと参加した時代である。

これら今日の西洋の人道主義という現実のもと判断を共有するものである。唯一侵略と人々を顧みない権力主義は、否定されるものである。

これらは正しい国家という現実への正しい考察なのである。これらは唯一人々が顧みられず、国家主義と権力主義という現実へ盲信することへの警鐘である。

正しい国家は正しい国民の生活に基盤しなくてはいけないのである。これらは為政が、国民生活と国民そのものへの正しい行動を求められることを意味する。

権力が国民を搾取することは否定されるのである。これらは理想という国家像を提案するものである。

これらは歴史が、人々の搾取を基盤として存在することへの疑問であり、正しい国家としての自己は国民の搾取でなく、国民への供与を求めるのである。

これらは既存現実からの転換であり、理想という現実への転換なのである。

これら歴史が既存現実を有することは、既得権益とともに現実を有することを意味する。

しかしながら、世界の趨勢と時代性において、グローバル化という現実は自己の特異性を肯定するものではないのである。

また現状のアメリカへの依存でなく、自立した成熟した国家への転換は、新しい国家基盤の創造とともに自己を要求されることは必ず存在するのである。

責任と自立というキーワードは、新しい技術革新とともに、国家が未来を希求する正しい判断であるはずである。